



第5巻第3号
通巻第51号

また戦争ですかあ？

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

からす新聞もいつのまにか五十号を超えた。すぐに廃刊する気なぞ毛頭なかったけれど、だからといって、どれくらい続けられるのか、些かなりとも心許なかったのも事実である。いろいろなることを書いてきたが、記憶を辿ってみると、不満をだらだらずるすと綴ったことが多いような気がする。世の中には私を嘆かせることばかりではなく、喜ばせることだっていろいろあるのだけれど。

日本では四月を区切りとして年度が改まる。もうすぐ、新しい学校、新しい社会へ旅立っていく人も少なくないだろう。寒さが緩み、暖かい陽射しを浴びた新緑、花々が輝く季節。柔らかな風に桜が舞い散る季節。舞い落ちる花びらを口実に泥酔者が続出する季節。それが日本の春である。春という語は多くの場合、プラスのイメージを持ち、「もう春ですな」「ええ、春ですな」などという、まるで意味をなさぬような話がほんわかと交わされるもの。そろそろ花見の日程や酒肴の手配の相談を始めるような時期であるはずなのだが、この春は些か趣が違う。交わされる会話といえば「それにしてもアメリカは……」「それにしても小泉は……」などなど

今回の戦争の特徴は何だろうかと考えるに、賛成している人間が減多にいない、ということに尽きるだろう。少なくとも、私は自身の人間で今回の戦争を肯定している者に出会ったことがない。これだけ反対一色なのは相当に珍しいのではないだろうか。しかし、それにもかかわらず、国家としての日本はアメリカの侵略を支持している。非常に不思議な話だ。

民主主義の土台のひとつが多数決の原理である。実際、振り返ってみれば、小学生の頃から、何かと言えば、多数決で物事を決定することを好む国民なのだ、日本人は。多数意見が常に正しいとは限らないけれど、多数の幸福を実現する可能性は高い(はずである)から、明白な正解がない場合には、多数決によって総意を決することも方法論のひとつとしてまちがってはいない。

ところが、今回に関して言えば、日本中の大半の人間が戦争反対を唱えているにもかかわらず、ごく一握りのあまりに尋常ではない人々の決定によって、戦争を支持する国家と

(最終面に続く)

今日の紙面から

- 一画 オープン面
- 二画 松本と話そう(ペンパン)
- 三画 芸術面
- レイズ・ギャラリ
- 四画 からすライブラリー
- CD 『池田真昌個展』対話
- 本 『ジーザス・サン』
- 映画 『バリー・リンドン』
- 五画 八面(国際面)
- ロンドンレポート
- 六画 社会面
- アルティマタム(最後通告)



からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

松本と話そう「ブルボンパン」

「冬木が死んだ。」

三月二〇日、朝、「日刊スポーツ」の見出しだ。

「理不尽大王」と呼ばれ、顔つきも体つきもまさにオバチャンという理不尽なプロレスラーで、「WAR」、「冬木軍」、「FMW」、「WEW」などのマイナーなプロレス団体のリングで嘘をつき、数限りない理不尽なプロレスを繰り広げてきた男である。

九年前後に担当記者を誘拐、丸刈り、雪中埋葬、消化器を吹き付けるなど虐める。それ以降はその理不尽ぶりに拍車がかかる。エスコートギャルには女子高生からAV女優まで登場させたり、歌手の谷本知美にはバリカンで頭の毛を刈られたり、同団体所属の黒田からはビーフンや納豆をかけられたり、同団体社長には放尿する公開処刑を行ったり。その一方、横浜の自宅はアライグマに荒らされたり。

そんな理不尽な彼だが(？)、去年の四月にはいきなり直腸がんが発見され即、手術を受けた。後、プロデューサーとなり裏方にまわって、表ながら暗躍。が、十二月には肝臓への転移が発見され再入院する。そしてそんな中、死の八日前には入院先の病院を抜け出し、「ZERO・ONE」のリングに上がり、橋本真也を五月五日の川崎大会で「最後」の対戦相手に指名していた。その余りにも理不尽さゆえに仮病説も出た。が、どこまでもそれを貫き、三月一九日、あっけなく死んでしまった。四二歳。

「ブッシュ、空爆開始！」

同日、夕方。「東京スポーツ」の見出しだ。どうせ理不尽な東スポのこと。冬木の甲いのための記事なんだろうと思いい、駅のスタンドを通り過ぎようとしたら、右にも、その右にも同じものが並ぶ。しかもその一つは「朝日」。「バカたれが。本当にやりやがって。」思わず口から出た言葉。何でだろ、不思議と体の力が抜ける。そのくせ顔は熱くなる。

そう、冷戦も終わり、もう歪み合わないで済む地球を確立しようとする世界の大方の人が「理想」が「現実」に少しでも近づくようにポジティブに思考するようになってきた。そこで、それまで無力だった国連をその具現化の枠組みの基本に据え、それがなんとか軌道に乗りかけたその矢先だ。そのテーブルを、x xおくれで邪xなチxのボン、キム・ジョンイル、いや違う、似たようなもんだけど、ジョージ・ブッシュが一瞬にしてひっくり返したのだ。

奴が世界の舞台上に登場して口くなことはない。世界が地球温暖化防止のためのCO2削減計画を取り決めた「京都議定書」は反故になるし、ニューヨークでは前代未聞のテロが起き、実はこれ自体も無茶苦茶で国際法からすると今回とアメリカがやっていることは同じなのだが、報復として一組織の一人を抹殺しようとしてアフガニスタンを侵攻し、国家主権を軽く踏みしるしそして今回の決定打。

神様、同じ「理不尽大王」でも、どうして無邪気な冬木の方なんだ？ 邪気の塊、ブッシュはあなたもそんなに嫌いなのか？

「SOS」

「アバ」の澄み切った歌声が二俣川駅の駅改札前の広場に響いている。自分にも響いたようだ。廉価CD商が陣取る隅の横の壁にもたれしばしその空気に紛れ込むことにした。

So when you're near me,
Darling, can't you hear me?
SOS

「これ、いいわね。誰の歌？」
年輩の女性にも響いていたようだ。

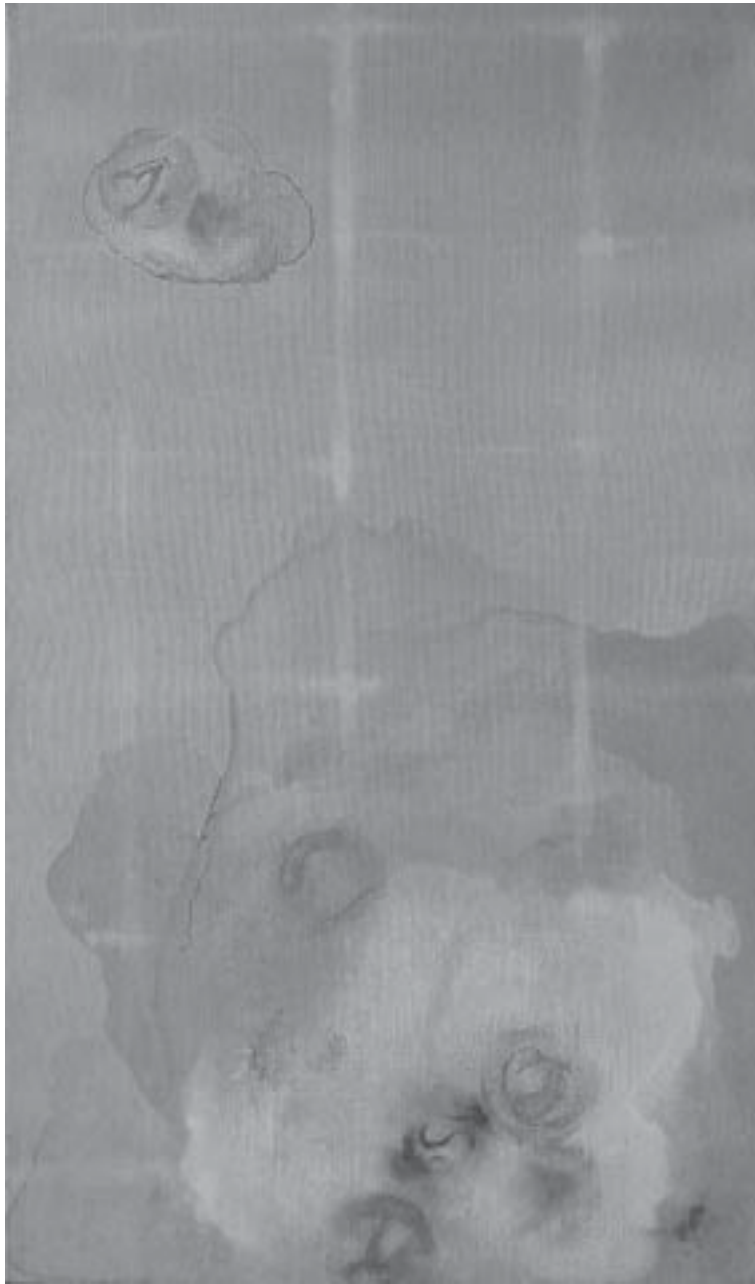
借金取り立て代行いたします

ストーカー バスター

tora@pda.co.jp
1843 N. Cherokee AVE: APT. #216
Los Angeles: CA 90028, USA
voice : +1-310-493-1001
facsimile : +1-323-466-5645

produced by
P.D.Agency

Rei's Gallery



ビー玉

ついに私にも、4月に結婚する友だちが現れました。
『入籍しました』のメールにはおめでとうの前にビックリしてしまっ
て、何故だか、ポツと一点を見つめてしまった。
その友だちに会った時、左手の薬指にはキラッと光る指輪、それ以上に彼女の真ん丸のかわいい瞳が、春の光と結婚の喜びでキラキラしていた。まるでビー玉みたいに。

池田真弓個展—対話—

杉並日の丸幼稚園にて

2003年

3月21日から23日まで



Art

本号記事でもふれた杉並の天沼の、この春閉園を迎える日の丸幼稚園で、日本画家池田真弓の個展が行われた。去る二十一日から二十三日であった。日の丸幼稚園の出身者である池田は、幼稚園の閉園と建物の解体を聞き、何が、場所の記憶をどこでとをできないかと考えた。

日本画の岩絵の具を用いた作品は、柔らかな自然光のなかで、透明感を増し、建物と場所の醸し出す空気のなかに漂うようだった。画廊で展覧会で、精力的に作品を出品し続ける彼女だが、自然の光の中で彼女の作品を観る機会は多くはない。人工的な硬質の光が作品の顔料の鉱物と対峙するのではなく、自然の光と風が通り抜けるような印象を受けた。描こうとする題材も、水や光や影や人の気持ちであるように、かたちを持たない、変化し続ける柔らかい存在である。

集った人びとが、幼稚園の遊戯室につくる、シルエットや話し声すら、彼女の作品のなから現れ出たかのような、不思議な空間体験でもあった。ひとつの場所の記憶が、訪れた小学校の恩師や、同級生



絵画から抜け出してきたような、恩師と人びとのシルエットがたゆたう不思議な空間。

たち、彼女の両親の友人や、幼稚園の関係者たちのなかに、確実に残ったに違い

(篠崎健一)

Jesus' Son

Denis Johnson

HarperPerennial, 1992

ISBN 0-06-097577-6



Books

クールなスタイル。こういって胡散臭い言い回しは好むところではないのだが、しかし、他にどう形容したものか。

現代のアメリカを表現するのに相応しい方法を模索した結果がこれなのか、あるいは、もともと彼の持っている資質によるものなのか。

ここに集められた十一の短篇はどれも私にとってはリアリティのないはずの登場人物たちによるリアリティのないはずの物語に、もかかわらず、決して華美な装飾などない文法から、飛び込んでくる情景は、如何にも鮮やかで。

暫く振りに気なる作家となった。

(全太)



バリー・リンドン

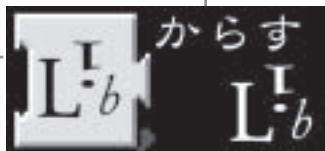
BARRY LYNDON

スタンリー・キューブリック監督

ライアン・オニール主演

1975年公開(イギリス)

DVD: HP-21148 ワーナー・ホーム・ビデオ



戦前の米英による誇らしげな前宣伝はやはりガセネタだったようだ。いくら兵器のET化が進んだとはいっても、結局頼りになるのは生身の兵隊。バグダッド市街が悲惨な白兵戦の舞台になるのはもう避けられまい。

一般市民を容赦なく巻き添えにする無差別攻撃は、第一次世界大戦がその始まりというが、実のところ18世紀までのヨーロッパでは、戦争は笑つちやうぐらい素朴に行なわれていたのだ。原っぱに両軍が並び、睨み合い、指揮官の掛け声の元、一斉に戦闘を始める。ある程度の時間が経ち、勝敗が明らかになったと思われたところで戦闘やめ。お互いが全滅するまでノーガードで打ちあうというようなものではなかった。それはプロ同士のスポーツのようなもので、節度ある戦争だった。

そんな戦いが見事に再現されているのが『バリー・リンドン』だ。イギリスを舞台に、ある青年が貴族として成り上がって行く様を描いた本作の中で、キューブリックは、綿密な時代考査にもとづいて、当時の戦いを忠実に再現している。

ところで、19世紀は帝国主義の世紀。我先に世界に飛び出していった彼らの「未開人」たちに対する戦いに、本国でのルールが適用されたという話は聞いたことがない。残酷な殺戮。どうやらその点は、昔も今も変わらないようである。

(望月)



Films



London Report

戦争が町にやってくる

大先生の曲でこんな題名のものがあった。『戦争が町にやってくる』* 歌い出しはこんな感じ。

戦争が町にやってくる。
海を越えてやってくる。

……省略……

* この曲を聴きたい方は

<http://go-zeta.com/music/dayon/dayon.html>



何だか、とうとう始まりそうな様子。嬉しいことでも、悲しいことでも、悪いことでも、何でも事が大きくなると単純に「おお」と思ってしまうワタクシ。これは本当に、不謹慎だとかそう言うことではなく、事の大きさに驚いているだけ。例えば自分に何か不幸が起ころうとしても、そう思ってしまう。もちろん、悲しいとか、嬉しいとかの感情はまだ別枠であるんですが。

そんな訳で、家で夕食を作りながら何気にテレビを付けるとそんな話題ばかり。イギリスに在る所為なのか？ 湾岸戦争の時よりも実感が有り、何だかドキドキと落ち着かない。鳥肉のスープを煮込みながら五十音を口に出して数えながら部屋の中を歩き回ってみたり、ご飯が炊けるのを待ちながら『マカロニほうれん荘』のギャグを幾つ覚えてるか数えてみたり、とにかく何かしなくちゃいけない様な気がして、久し振りに曲なんか作ってみたりと色々。

「そう言えばこの前、国際電話カードを買ったんだ」とふと思いつき、全然お母さんにメールを返してなかったの、実家に電話してみること。丁度、同じ時に向こうも電話してきたらしく、携帯電話にメッセージが。改めてかけ直すと、戦争が始まりそうだから、送金しよう

か？」との有り難い申し出。「いや、前回のがまだ残ってるし、いきなり物価が跳ね上がる事もないだろうから、大丈夫。」と思わず断ってしまった……。それに、向こうにイギリスとアメリカが攻めに行くだけだしねえ……。と会話が続く。その後は「兄貴は元気か？」とかそんなたわいのない話をして電話を切った。電話を切った後で、「そうか、アメリカが向こうに攻めに行くだけなのか……。」と自分の言った事をふと、思い返した。

そう、僕らの町には戦争はやって来ない。

今更、戦争の善悪をここで議論するつもりはないのだ。ただちょっと、酒が飲みたいよいう気分になっただけ。冷蔵庫にあった飲みかけのワインを取りだす。「そう言えば、家のバカネコが元気かどうか聞くのを忘れたな」とか、「地元の野球小僧達は元気だろうか?」とか、「あいつの子供は大きくなったかな?」とか、そんな事ばかり考えてしまう。結局、そう言うことなのだ。

よし！ 友達よ、今日は飲もう。無くならない戦争の話でも着に。亡くなってしまったジョン・レノンの話でもいい。一晩中、話は

尽きないかもしれない。飽きてしまったら、他のことを話せばいいだけなのだ。オートバイの掃除の仕方とか、安い焼鳥屋の話でもいい。戦争なんて、酒のつまみになるぐらいがちょうどいいのだ。本当に起こってしまう必

要はない。

今日は上手にご飯が炊けた。
大切なのは、そう言うことだったりする。
(神山)





上 萬来舎内部。左外部にはイサム・ノグチ作の彫刻「無」がある。

三田の慶応大学キャンパスにある萬来舎は、んらいしゃ)をこ存知だろうか。キャンパスの中庭に入って左側二階建ての白い建物の中にある瀟洒な談話室である。周囲の高層化される校舎や新たな大学院建設の勢いに押されるように、萬来舎は、今のところ解体される運命にある。地域や関係者による保存の願いは聞き入れられず、大手日刊紙によると、この建物解体と一部移築の計画に対して、工事の中止を求め、仮処分申請が東京地裁になされるに至ったようだ。

研究室ばかり集まったちよどよいスケールの「こぢんまりした建物は、建築家の谷口吉朗*によって一九五一年に設計されたものである。当時世界的にひろがった合理主義的なデザインの特徴をもつ洗練された建築であり、萬来舎は、この建物の一部を占める教授や研究者たちのための談話室である。この部分は、谷口と彫刻家イサム・ノグチとの協同によりつくられた。

現在は、優れた芸術作品をよい状態で保存するという理由からであろうか、あるいはその空間の目的がなかなか達せられないからだろうか、普段は使われておらず、内部に入ることはまず不可能である。谷口の生涯百年を記念した行事の一環として公開されたことがあったが、

その空間は、無条件に心に響くものである。西欧と日本の文化の中間に位置するイサム・ノグチの芸術が、日本の空間様式と合理主義という両側面をもつ谷口の建築のなかに融合した、モダニズムの空間芸術の傑作である。

谷口がこの建物を建てた場所はもとも、明治初年に福沢諭吉が、建学の精神に基づいてオリジナルの『萬来舎』を開設した処であった。『萬来舎』とは、名の由来するとおり、人びとに開かれ、人びとが集い見識を求め深めようとする対話のサロンであった。それが戦災で壊滅したのであるから、新しく建てられる『新萬来舎』に対して、谷口は、その精神を継承し、あらたな時代と文化を開くものにし、いと相当の覚悟をもって設計にあたったという。その結果、半世紀を経た今日、私たちが今なお、純粹にこころを揺さぶられる空間が残ることになったのである。

新たなものをつくらうとするとき、古いものを壊さなければならぬのは、当然のことかもしれないが、今度計画されている建物が、二代にわたる、萬来舎の場所と時代、文化の精神を受け継ぎ、発展させ、なおも現存する空間の芸術的価値を凌ぐものであるかという、実際の計画を見ていないが、それは不可能だと言ってしまう見当はずれではないだろう。万が一にも、それが継承され、新たな芸術がそこに生まれるならば、まだよいのだが。

70年の歴史を持つ幼稚園が閉園し、その間ずっと使われてきた建物が取壊されることになった。杉並の天沼のことである。一辺が4メートルほどの八角形をした遊戯室を中心に、園児の年齢に応じた3つの小さな教室と1

つの管理室が、ひとつずつの辺をおいて接続されている、小さくてかわいらしい建物である。昭和の初期までのある年代に集中してつくられた、幼稚園の典型的な形式の残存例であるという。絶えず、ほぼすべての園児を視界に収められるばかりか、園児に対する教育が正しく行われているかも把握することができ。突出した教室部分は当然のこととして、遊技室にもさまざまな方向から光が入り、柔らかく開放的な空間である。丁寧に手入れされてきた建物の床は、黒く光り、建物の過ごした年月の長さを伺い知ることができ。

取壊された後どうなるかはまだ明確ではないが、おそらく住宅か、それらの集合体がつくられる。園児たちの成長を見守った木々も伐採されてしまつと聞く。確かに建物としては老朽化しているが、ここには開園の精神も、多くの園児達が築立っていた痕跡すらも何も残らないのかという気持ちを抱かないではいられない。

一般に、土地を売買するときには、上屋を解体し樹木を抜根し、更地の状態にすることが条件となることが常である。例えば相続税を現金で納める替わりに、多くの場合は土地であるが、で収める場合も、財務省との取引は更地の状態となされる。そこにどんなに立派な樹木があろうともである。



日の丸幼稚園外観



遊戯室の内部 Libで触れた池田真弓の個展が催されていた

ゆく方法は、いつでも明快であるが、そのような直線的な思考はすでに現代のものではないはずである。70年も80年も成育した木々は、その土地の価値を上げさえしようが、決して下げることではないのではなからうか、と心の中で思っている人たちが、実際に、不都合や面倒くさいことを引き受けて、思い切って一歩を踏み出してみなければならぬのだらうか、そんなことを積み重ねてゆくことでしょうか、多少なりとも大きな流れはかえられないのかと思うこの頃である。

* 藤村記念堂、秩父セメント(現太平洋セメント)第二工場、ホテルオークラロビー、東京工業大学水力実験棟、講堂、上野の国立博物館や東宮御所、などをデザインした日本近代の重要な建築家のひとり。日本の伝統的な空間構成と世界的にひろがった合理的な空間構成、近代主義の解釈をおこなった。記念碑なども多数デザインした。

(篠崎健一)



アルティメタム

アルティメタム ultimatum 「最後通告」という言葉は、12年前のあのとき以来だ。

3月18日、米英のトップによる演説が行われた。スピーチライターによって書かれたブッシュ大統領の演説には、例の妄言の類いは出てこずつまらないが、いつもにも増してウィルウィルウィル・・・will がなんか耳についた。数えてみると10分あまりの演説の中で27回と、そんなにやたらと多いわけでもないんだけど・・・。

will とは、「単純未来」と「意志未来」である。補足すれば、「単純に、自動的に行き着く未来」と「意志の力で実現させる未来」。自分たちの強固なる意志をもって前進すれば、単純に明るい未来が待っていると、大統領は語る。

We will do everything to defeat it

「それを打ち負かすために、我々はすべてのことを行います」(意志未来)

The United States with other countries will work to advance liberty and peace

「合衆国と他の国々は、自由と平和を促進させるために働きます」(意志未来)

Iraq will not disarm so long as Saddam Hussein holds power.

「サダムが権力の座にとどまるかぎり、イラクが武装解除することはありません」(単純未来)

War criminals will be punished.

「戦争犯罪人は罰せられるでしょう」(単純未来)

We are now acting because the risks of inaction would be far greater.

「我々がいま行動を起こすのは、起こさなかったときのリスクがずっと大きいたろうからです」
(これは「仮定法」で、「もしも行動を起こさなかったら」という前提があるために would になっているだけで、単純未来の will である)

This is not a question of authority, it is a question of will.

「これは権限の問題ではありません、意志の問題なのです」(will は名詞で「意志」。安保理決議による武力行使の権限に触れて)

数え上げていったらきりがなく、万事この調子である。能天気なほどいささかのプレもなく、自信に満ちている。少しぐらいの「苦渋」を感じさせるかと思いきや、待ちきれなかったイベントがやっと実現できることへの率直な高揚感ばかりが目立つ。

一方のブレア首相。こちらはそもそも雄弁家として知られる人による、質疑のある国会での演説であり、彼自身の言葉だと考えていだろう。

語数にして大統領の3倍ほどの演説は、舌足らずの大統領をバックアップしたものだ。長々とした説明からは「苦渋」を読み取れないこともないが、受ける印象はむしろふっ切れた勢いである。まくし立てる感じだ。

大統領と同じように will は多いが、客観的に畳みかけるように「単純未来」を語る次のような件は、いくぶん感情的な大統領演説とは趣を異にする。

What will Saddam feel? He will feel strengthened beyond measure. What will the other states that tyrannise their people, the terrorists who threaten our existence, take from that? They will take it that the will confronting them is decaying and feeble. Who will celebrate and who will weep if we take our troops back from the Gulf now? 「サダムはどう思うでしょう? 計り知れないほどの強気に出るでしょう。他の自国民に圧制を強いる国家や、我々の存在を脅かすテロリストたちが、それをどう取るか。自分たちに敵対しようとする意志が弱まり衰えていると取るでしょう。我々がいま、湾岸から兵を退いたら、誰が祝福し、誰が悲しむのでしょうか」

また首相は舌足らずの大統領を、たとえば must と have to を巧みに使い分けることでフォローしている。

ちなみに、must は主観的「私の考え」(他の人がどう言うか知らないけど、私はしなきゃいけないと思う)、have to は客観的「みんなの考え」(これは私だけが言うんじゃない、みんなの義務なんですよ、だからしなきゃいけません)

* ちなみに脅迫の had better はさすがの大統領でさえ使っていない

大統領が10分ほどの演説で must を使ったのは2回のみである。

Saddam Hussein and his sons must leave Iraq within 48 hours.

「サダム・フセインとその息子たちは、48時間以内にイラクを退去しなければなりません」

首相の決意も固い。

I believe passionately that we must hold firm to that course.

「私は、我々がその道をしっかりと進んでいかなくてはならないと、熱く信じています」

we must demand that Saddam disarms

「我々はサダムに武装解除するよう要求しなくてはなりません」

(最終面に続く)

(七面から続く)

we must tackle it

「我々はそれ(イラクの脅威)に立ち向かわなくてはなりません」

一方の have to だが、大統領の発言には一度も出てこない。国際社会の義務とか、そういうまどろっこしいことは念頭にないということか。これに対して、最後まで国連の枠組みに固執したブレアは、フランスを始めとした違う立場の国々にも呼びかけるように、have to を何度か使っている。

The tragedy is that the world has to learn the lesson all over again that weakness in the face of a threat from a tyrant is the surest way not to peace, but—unfortunately—to conflict.

「悲劇なのは、圧制の脅威に際して弱腰であれば、平和ではなく、不幸にしてそれは確実に紛争つながる道だという教訓を、世界が再び学ばなくてはならないということです」

this indulgence has to stop

「このような(イラクに対する)甘さに終止符を打たなくてはなりません」

We have to act within the terms set out in resolution 1441

「我々は決議 1441 の枠内で行動しなくてはなりません」

ちなみにブッシュ大統領も「義務」に言及しているが、その主語は得意の用語「自由諸国」である。

Free nations have a duty to defend our people by uniting against the violent.

「自由諸国には、暴力に対し団結することで我々の人民を守る義務があるのです」

「自由諸国」にいかなる客観性があるかは定かではない。フリー・ネーションズ? どこが?(望月)

(一面から続く)

なってしまうているのだ。以前にも書いたように、それは人々がそんなばか者どもに投票してしまったことに起因するわけで、あなたが有権者である限り、それはあなた自身の責任でもある。少なくとも、今後、選挙がある度、票を投じる前に、是非、このことだけは思い出してもらいたい。

いろいろな意味で人間は自由である。時代や場所によって、その幅は随分変わってくるけれども、本質的には全く自由な存在なのである、人間というものは。

例えば、私は自由に国家を批判することができる。「小泉の馬鹿がまたぶざけたことをしやがって」などと書くことも言うこともできる。その程度には自由な国なのである。仮に、バグダッドを守っている一兵士であつたり、アメリカの頭のおかしい大統領の

直屬の手下だったりしたら、己が国家を批判することはできないかもしれない。けれども、そんな人々でさえ、心の中で批判することは自由なのである。これが人間の自由というもの。肉体や経済にいくら桎梏を課そうとも、心までは縛れない。心は徹底的に自由である。

しかし、その自由を奪う方法がないわけではない。例えば、トマホーク。トマホークがあなたに向かつて、ヒューシユルシユルドーと飛んできた瞬間、あなたの自由は終わる。さつきまであらゆることを自由に思考できたあなたは、もはや何を選ぶこともできなくなる。

戦争があつてもなくても、ブッシュがいてもいなくても、いつかは誰もに死が訪れる。当たり前だ。しかし、生命が終わると終わ

らされるのでは事情は全く異なるだろう。ブッシュが侵略を命ずることによって、(ついでに言うなら、小泉がそれを支持していること)によって、フセインが徹底抗戦を指示することによって、この星の上から、いくつもの自由が理不尽な力でかき消された。そして、この先も、まだまだ多くの自由が消えていってしまう。

今年の春はつまみ酒が呑めそうにない。桜の花が例年通りに私たちを歓迎してくれても、人が寄せれば、自ずと戦争の話題になる。

来月こそは、楽しい話題をここに記そうと思いつつ……その頃にもまだ戦争が終わっていないという可能性を否定できない現実。はあ。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki; architects

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第五巻第三号(通巻第五号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇三年四月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾
ファミマ
中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451
宝仙寺
ファミマ
おうめかいどう
中野板上駅
ファミマ